

語学教育部 第2回FD研究会 実施報告

テーマ：「大学生のこころとからだの現状を知る」

日時：2009年9月12日（土）14:00～16:30

場所：15号館1階マルチメディア教室

(1) 総括

第2回語学教育部FD研修会は、2007年9月の第1回研修会を受け、その三日前にも全学FD研究集会が行われるという気運の高まりのうちに開催された。具体的なテーマとしては、発達障害などによって外国語学習の上で困難を覚える学生にどう対処するかという問題が提起された。当日は本学で学生のカウンセリングを担当する進藤勝久氏と、青年の発達障害を専門とする向後礼子氏による二つの講演が行われ、語学教育部専任教員を中心に、非常勤講師の先生方、教職教育部、健康スポーツ教育センターの教員など、50名近くの出席を得た。質疑応答も時間ぎりぎりまで活発に行われ、日々の授業実践の中で各人が直面している問題と、その対処の方向性が明らかにされた有意義な集会であった。

(2) 発表者とタイトル

講演1

進藤勝久（近畿大学保健管理センター長）「近畿大学学生のメンタルヘルスの現状とその対応」

近年マスコミを中心に学生のメンタルヘルスに関する問題が取り上げられることが増えているが、現実の状況を正しく理解するためには素人判断ではなく、医学・心理学的な見地からの視点が不可欠である。

本講演ではメンタルヘルスへの医学的対応の基本となる概念を整理・分類し、個々の用語がどのような病状を扱うものであるのかが詳細に説明された。具体的には、研究の進展によって一般の人々が考えているよりもはるかに多くの医学的分類が行われており、今日では以前より細かい診断が可能となっていることが明確に示された。また、個々の症例に対して適切な対応・処置が求められている現状も明らかとなった。

講演 2

向後礼子（城西国際大学福祉総合学部助教・精神保健福祉士、2009年10月より近畿大学教職教育部特任講師）

「発達障害のある青年の特性—大学における支援について考える—」

講義に遅刻する、課題提出の期限が守れない、ノートが取れない、グループ作業ができないなど、発達障害を背景として生じている（もしくは生じている可能性のある）困難には、本人の自覚がある場合とない場合がある。本人に自覚がない場合、その困難が発達障害に起因しているのか否か、見極めることは難しいし、発達障害を疑ったとしても、本人に伝えるには、課題が大きい。また本人に自覚があったところで、その困難を周囲に開示するか否か、障害支援の理解をめぐるても、検討課題は多い。しかし大学としては、こうした学校生活の中で予測される様々な困難に対し、発達障害の診断（もしくは判断）の有無にかかわらず、対処していく必要がある。本講演では、主に時間（スケジュール）の管理、課題の遂行、コミュニケーション、対人関係（マナー）などに関する困難に対して、具体的な支援策が詳細に報告された。

（文責 松村博史、吉田幸治、大西博子）